

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 森川 裕貫

本論文は、1910年代から1920年代前半にかけての中国で、国家の制度構想をめぐって展開されていた論議について考察したものである。特に、章士釗が中心となった『甲寅』雑誌に寄稿していた論者に焦点をあてている。

第I部はまず章士釗について考察を行う。第1章では、辛亥革命からまもない時期に章士釗が国家制度をどのように構想したのかを論じた。とくに、中央政府がどれほどの権力をもつべきか、社会の多様性をどのようにして保っていくべきかといったことが章士釗の関心事項だった。つづいて第2章では、梁啓超と章士釗との論争を軸に、章士釗の主張を浮かび上がらせる。梁啓超は、教育によって人格の優れた人々を生みだし政治を主導させようとしていたが、章士釗はこれを批判し、人間の不完全さを前提とすれば制度の構築が不可欠と指摘していた。第3章は章士釗の英文著作を分析し、職能代表制を中国に導入することに彼が強い関心を示していたことの意味を、同時代イギリスの思想家とのやりとりに着目して論じた。

第II部は、章士釗から啓発を受けた論者に注目する。第4章は、高一涵の思想形成を扱う。彼が章士釗の観点を受け継ぎつつ、多元的国家論や職能代表制などについて清新な論陣を張ったことが指摘され、同じ『新青年』で健筆をふるった陳独秀との分岐が示唆された。第5章は『太平洋』雑誌に論説を発表していた人々について分析を行った。彼らが、やはり章士釗の構想を受け継いで、地方政府に権限を与えるような制度構想を提示した背景には、国際連盟によって実現される世界平和への強い期待があった。

第III部では、やはり章士釗と関わりの深い張東蓀について論じた。第6章では張東蓀が1910年代にいかなる制度構想を唱えていたのかを分析し、その背景には多様性の尊重や制度そのものの重視といった観点があったことを指摘した。第7章は1920年の中国社会主義論戦における張東蓀の立場について考察した。彼がギルド社会主義に関心を持ちボルシェヴィズムに反対した背景には、やはり社会の多様性の保持を重視する観点があった。

本論文は、これまで十分に光を当てられなかった思想系譜を見いだし、雑誌・新聞に散在する大量の史料にもとづいて彼らの主張を明らかにした労作といえる。本稿でいうところの政論家という語は分析概念として最適なのかなお検討の余地があり、本論文が取り上げた人物の提起した個々の論点について更に考察を深める可能性も残されているが、本論文に示された大きな成果にかんがみて、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと判断する。